

ガザとジェノサイド：イスラエルの変化は期待できない

ジェレミー・ソールト著、脇浜義明訳 パレスチナ・クロニクル、2025年11月1日



イスラエルはガザでの虐殺を続けている。(Photo: via WAFA)

これがシオニズムという人種差別的イデオロギーが生み出した状態である。「西側」は自らが実際に生み出したものに目を覚ます必要がある。

この2年間世界ガザで見た恐ろしい非人間的現象は、2023年に基地と入植地を奇襲されて頭にきたイスラエルがとった一時的異常行動ではない。非人間性はシオニズムの中核である。それは、ヘルツルが「貧乏な汚い人間」が境界を越えて幽霊みたいにうろついていると無神経に言った時代以降ずっと、パレスチナを奪い取る唯一の術と見做されてきた。

1946年のアーサー・ケストラーの小説『夜の泥棒：ある実験の記録』(Arthur Koestler: *Thieves in the Night: Chronicle of an Experiment*)はパレスチナ人を泥棒にした。米国の親イスラエル派の歴史小説家レオン・ユリスの小説(『エクソダス栄光への脱出』や『ハッジ』)で露骨に見えている人種差別は、ずっと前にケストラーに表現されていたのだ。

『夜の泥棒』の中でケストラーは、アラブ人を「広い広場で泥だらけになって遊ぶスラムの子ども」と描いている。彼らは中世時代の遺物で、「権威をもって断固たる扱いをすれば静かになる」と書いた。彼の人種差別思想は、彼の『約束と実現：パレスチナ1917～1949』(*Promise and Fulfilment*, the Macmillan Company, 1949)という1948年戦争を描いた作品でもっと露骨に表れている。

シオニスト入植者は、最初から、大英帝国占領軍に擁護された。シオニスト・ユダヤ人移民は武装を認められ、入植地を守る民兵組織を編成したが、パレスチナ人は武装を許されず、シオニズムの動き抗議する住民の反乱であった「アラブの反乱」(1936～1939)は、武器を持っているのが見つかったら射殺された。

1937～38年、シオニスト・ギャング団はエルサレムやハイファの市場などで爆弾テロを展開し、多くの人を死傷させた。1947年になると、テロ集団は武器をアップグレードし、「樽爆弾」や、爆薬を詰めたドラム缶をトラックの後方

荷台から市場に落として爆破させる破壊活動を頻繁に繰り返した。ユダヤ人のやりすぎと、ユダヤ移民の過剰にブレーキをかけようとした大英帝国をも障害と見て、シオニスト・テロは彼らをも襲撃した。

1948年のナクバは、現在のガザ戦争と同じように、正規軍との戦争ではなかった。「アラブのリング・オブ・スティー爾」に包囲されたというシオニストの主張は嘘である。きちんと戦争準備を整えていたのはシオニストだけであった。アラブ諸国の介入は最小だった。南部で戦闘したエジプト軍、東からパレスチナに入った少数のイラク軍、ファウジジ・アル・カウクジが指導したシリアのアラブ「解放軍」の戦いはあったが、ほとんどはパレスチナ人自身で、村人が鳥撃ちに使った旧式銃を使って懸命に防戦したのである。数的に見ても、戦争初めには戦闘員の数はシオニストの方が2倍多かった。戦争末期でも同じであった。それに大英帝国が支配する傀儡王や摂政（エジプト、イラク、トランスヨルダン）を通してアラブへの武器供給を制限したので、アラブ側の武装は貧弱であった。

この「ナクバ」は、ウィキペディアが説明しているような「内戦」ではなく、新規に到来した入植者による征服戦争であった。長年計画してきたジェノサイドを起動したものであった。ここで個々の事実を繰り返すことをしないが、現在のガザ・ジェノサイドとの対比にうえて注意すべきことは、シオニスト民兵による非武装民間人への残虐な虐殺である。

つまり、1948年から現在のガザまで、一貫したパターンがある。女・子どもも容赦なく、男と同じように殺害した。シオニストはパレスチナ人の村や町に突入して、動くものを何でも撃ち殺した。戦闘員だけでなく、パレスチナ人がすべて標的であったのは、今のガザ・ジェノサイドと同じであった。

虐殺は住民に急いで逃げろという警告の役割を果たした。「年齢に関係なく」だれもかれも追放せよと、テロ民兵指導者で、のちにイスラエル国首相となったイツハク・ラビンが命令した。デイル・ヤシーン村を襲ったシオニスト右派テロ組織「イルグン」と「レヒ」が使った武器は、短剣、刀、手榴弾、殺害前のレイプであった。彼らは生き残った村人をトラックの荷台に乗せてエルサレムを勝利パレードし、そのあとデイル・ヤシーン村へ戻って、石切り場で殺害して死体を遺棄した。犠牲者の3分の2は女性と子どもで、この点でも現在のガザ・ジェノサイドと似ている。

リッダでは、ラビンの命令で住民がみんな追い出されたが、その前にダハマッシュ・モスクに避難していた大勢の民間人が機銃掃射で殺害された。ドゥウェイマ村では数百人の男、女、子どもが殺害されたが、子どもは、弾丸を節約するために、こん棒で頭を殴打して殺害した。

これらはどれもその場の勢いとか思いつきの行為ではなかった。すべて、パレスチナの地からパレスチナ人を追い出すための計画的行動であった。村を襲う前には友好を装って村へ入り、戸数や家の配置などを調べ上げ、村の土地を強奪する方法が入念に練られたのであった。

強奪したパレスチナの地や固定資産にヘブライ語の名をつけるために、「命名委員会」が設立された。追い出されたパレスチナ人は固定資産の「不在所有者」となり、イスラエル国成立後もイスラエル内に残ったが前と異なる場所に住んでいたパレスチナ人は「存在する不在所有者」と分類され、その財産も依然として奪取の対象となった。占領された村や町では、家具、書物、絨毯など、あらゆるものが略奪された。デイル・ヤシーン村では女性の死体から指輪やブレスレットが獲られた。

しかし、パレスチナを全部盗み取る目的は国際社会の介入で中断されたが、シオニストの目的は中断しなかった。国連のパレスチナ分割決議で有利な領土を手に入れたが、「分割はパレスチナ全土を征服するための足掛かりにすぎない」と、野心を捨てなかった。

残酷さ、野蛮さ、アラブ人の命への無関心は、1948年から少しも変わっていないし、ケストラーとユリスが表現した人種差別的軽蔑と嫌悪も変わらなかった。実際にイスラエルがやってきたようにパレスチナ人を殺害することは、ケストラーとユリスの中にしっかりと予言されていた。

シオニストの残酷な行為は、今はかなり忘れられているが、数百件に留まらない。1950年代や1960年代にガザやヨルダン川西岸地区への攻撃は、毎回数十人の民間人を殺害し、その多くは女性と子どもであった。それぞれの攻撃は、先住民からパレスチナの土地を強奪する計画に基づく過激な暴力行為の一環であった。

こういう暴力は無数で、日常的に行われてきたが、国際的怒りに訴えるには大きな事件を挙げるだけで十分だろう。1967年戦争の後のイスラエルの破壊と民族浄化は、西側メディアはエジプトのナセル大統領の敗北を嘲笑う報道に忙しくて、まったく報道されなかった。6月6日にエジプトから先制攻撃があったというイスラエルの主張は全くのウソで、2

003年のイラク攻撃の時に政治家やメディアが流した大量破壊兵器の存在と同様、事実無根のウソだった。あの1967年6日戦争では、イスラエルは、12世紀に建設されたムガラビ地区、エルサレム旧市街のアル・ハラム・アッシャリフ（ユダヤ教の西の壁）の隣の地区で、135世帯と2つのモスクがある地区を、ブルドーザーで壊した。ブルドーザーによる破壊で外へ飛び出した数百人を、彼らをアンマンへ強制移転させるために待機しているバスに乗る者にはチョコレートを与えて乗せたが、多くの人は拘束された。何人かは殺害され、パレスチナ人の所有物と一緒に、瓦礫の中に埋められた。

当時エルサレム市にニューヨークタイムズ特派員として住んでいたアブドラ・シュライファーは、自著『エルサレムの崩壊』(*The Fall of Jerusalem*, 1972)の中で、イスラエルがパレスチナ考古学博物館からヨルダン死海文書を盗み出した様子を書いている。実際、エルサレム市の東半分は今やほとんど盗みとられている。略奪は日常茶飯事であった。エルサレム周辺の村7村が破壊された。ナブルスではユダヤ人略奪者がスーツケースで運べるものを片っ端から持ち去り、その後軍がダイナマイトで家を破壊したと、ナブルスのカトリック教会の聖職者の証言が残っている。略奪はエルサレムとナブルスだけでなく、いたるところで行われた。略奪は1967年戦争のときだけでなく、現在も西岸地区で続いている。

1982年、イスラエル軍の指図で、レバノン右翼「ファランヘ党」などのキリスト教マロン派民兵がベイルート難民キャンプで大量虐殺した「サブラー・シャティーラ事件」があった。イスラエルの汚い仕事を代行するためにレバノン・ファシスト民兵がサブラーとシャティーラの2つの難民キャンプへ送り込まれ、数千人の難民を殺害した。野獣のような殺害行為が、銃でなくナイフで行われたために、音が聞こえなかったから次の犠牲者は逃げるができなかった。

この殺人劇と、その後4か月間で2万人近くのレバノン人とパレスチナ人を殺害したのに、イスラエルは誰からも罰せられなかった。これがますますイスラエルを増長させ、殺人劇の設計者アリエル・シャロンはすぐに政府へカムバックした。

1982年に続いたのは2006年のレバノン攻撃で、1200～1300人の民間人殺害、市民インフラ（下水事業、電力発電所やガソリンスタンド、橋、道路）などの全面的破壊、並びに住宅、学校、病院、モスクの破壊を行った。これがイスラエル戦術「ダヒヤ・ドクトリン¹」の誕生である。

2024年にイスラエルはまたレバノンに戦争を仕掛け、ベイルートと南レバノンの村や町で数百人の民間人を殺害した。ミサイル攻撃の他に、数千個の爆発仕掛けのポケベルをレバノンにばらまいて42人を殺し、数千人を負傷させた。ポケベルを顔の高さに挙げると爆発する仕掛けで、負傷者は視力を失ったり、手や指を吹き飛ばされた。

ネタニヤフはこれを成果として祝福し、記念に金のポケベルをトランプにプレゼントした。ポケベルの画面には「両手で抑えてください」という文言があり、トランプはこの大量テロ攻撃を「偉大な作戦」と呼んだ。

2006年のレバノン侵攻の後、ガザへの空と陸からの攻撃の波がずっと続き、2023年10月7日のパレスチナ側の反撃を引き起こした。2008年と2023年の間に、ガザとパレスチナで7363人（女性641人、少女279人、少年1358人、成人男性5053人）が殺害された。占領地で死亡したイスラエル兵は377人であった。

すでに20世紀早期にシオニスト指導部はパレスチナ全土を奪い取る計画であったが、その後数度戦争や襲撃を行ってもその事業は未完であった。だから、イスラエルは「和平交渉」を尊重しなかった。パレスチナ人全部を消し去らなければならなかった。和平が不可能だからでなく、イスラエルがそれを望まないからである。まだ、和平は要らない、イスラエルが望む条件以外の和平は要らないのだ。

このパレスチナ全土の制服という歴史的ミッション実現に向けてあらゆる努力が試みられた。だから、国境を定めなかった。和平交渉への要請を拒否するか、いろいろ口実をつけて引き延ばし、その間に入植地を作ってパレスチナを奪っていった。

イスラエルはパレスチナの地を共有する気はまったくない。それは1948年のナクバでも、現在のガザ・ジェノサイドでも、明らかである。握手と笑顔の後にはいつもパレスチナ人が受け入れないことを承知の条件を突きつけるのだ。

確かにガザ・ジェノサイドを世界は怒っているが、しかし世界は、現在の暴力は過去の暴力の延長で、未来も同じように暴力が続くことを理解していない。世界は、イスラエルが人間性の根幹を攻撃していることを理解していない。イスラエルが1948年以降ずっと虐殺している子どもの命こそが、人間性の根幹である。

¹ 気に入らない外国政府に圧力をかけるために民間インフラを大規模破壊する戦争犯罪戦術。

そういう残虐非道を続けているのに罰せられないために、その非道が継続する。過去2年間でイスラエルはガザで少なくとも25,000人の子どもを殺した。これは表面化した殺害の数だけで、本当の数は分からない。何故なら何十億トンもの瓦礫の下に埋もれている死体は分からないからだ。これは世界史上最も恐るべき犯罪の一つだが、イスラエルはその罰を受けていない。

イスラエルのパレスチナに対する戦争は国際法と世界を安全な場所にするために設置された国際機構に対する戦争でもある。それは、自己を正当化するために野蛮な古代史に依拠する国家の近代文明に対する戦争である。敵 一軍ではなく人民一を情け容赦なく徹底的に破壊する戦争である。

イスラエルは国際法なんか気にしない。パレスチナ人の命、子どもの命も気にしない。でないと、子どもの大量虐殺をして平然とした神経でおられずはさすがない。このような人でなしの水準に国民を転落させるには、社会はどこまで墮落すればよいのであろうか？

これがシオニスト・イデオロギーが作りだした国である。「西洋」はもうそろそろ目覚めて、自分たちが創造に力を貸した国を自覚してよいのではないか。それは1950年代に平和を愛するキブツの人々がキャンプファイアを囲んでギターを弾いた国ではない。歩く過程ですべてを破壊する核武装した忌まわしいクリシュナ神みたいな化け物だ。

イスラエルは過去から学んだ。しかし「西側」は学んでいない。イスラエルが学んだのは、何をやっても許されるということだ。その「同盟国」や「友人」たちは、押しのけられる臆病者で愚か者だと自らを露呈した。過去に通用した手法は未来でも確実に通用し、四つの結末が待ち受ける：

1. イスラエルはアラブ地域での拡大を続け、最終的に地域全体を支配する。
2. イスラエルは最終的に、米国の直接的な軍事介入なしには勝てない戦争を開始する。その時点で軍事指揮官が反対を勧告し、世論が「特別な関係」の終結を求める中、米国は介入を拒否する可能性がある。
3. 敗北に直面し、あらゆる平和的解決を意図的に不可能にすることで自らを追い詰めたイスラエルは、敵国に対して核兵器を使用し、世界的な危機を引き起こすかもしれない。もし「友邦」や「同盟国」が離反すれば、イスラエルはそれらに対しても脅威を与える可能性がある。
4. これらの事態に至る前に、イスラエルは内部の憎悪によって崩壊するかもしれない（現在、ラビの助言に従い徴兵を拒否する20万人の超正統派青年による反乱が起きている）。イスラエル国内では、憎悪と軽蔑がパレスチナ人に限定されているわけではない。